

【佳作】

父から学んだこと

岩元 伊吹（東京都 暁星中学校 2年生）

僕の父は帰宅前には、必ず自宅に帰るコールの電話をする。ある日、いつもの様に電話が鳴った。内容はいつもの帰るコールとは少し違うものだった。母は、少し驚いた様子で、父と話していた。心配そうな母は、父との電話を切ると僕と弟に言った。

「お父さん、これから帰ってくるけど、右目を殴られて真っ青なんですって。少しびっくりするけど。大丈夫だから。」  
 と言う。何が起きたかわからず、僕と弟は動揺した。

一時間くらい経った頃、父が帰宅した。家族に心配をかけないようにと、ドアがいつになく静かに開く。そして、ゆっくりと家族の待つリビングに入ってきた。

先に父がけがをして、帰ってくるとは知っていたけれど、僕と弟は父の顔を見て、言葉が出てこなかった。母はそんな僕たちの姿を見て、父の顔を見て笑っている。

「まるで漫画のような顔になってしまっただけだ。」  
 父も

「少し油断してしまっただけだ。」  
 と言う。それから、どうして目を殴られけがをしてしまったかの話を父がしてくれた。

僕の父は、精神科医だ。父の働く病院は、三百人の患者の方が、入院している。比較的精神病の中でも重い人が多く入院している。私も何回か父の勤める病院には行った事がある。私達が体の具合が悪くていくような町中にある病院とは少し違う雰囲気だ。漂っている。少し恐怖すら感じてしまう事もある。

そんな病院で働く父が、今日、興奮する患者さんに殴られてしまったという。

殴られて腹を立てているだろうと、父に聞くと自分が油断していた事が悪いだけだと言う。僕はそんな父の発言に驚いた。

自分なら、どうだろう。怪我をさせられて、間違えなく腹をたて、やりきれない気持ちでいっぱいのはずだ。けれど、父はとても穏やかな表情をしている。母も意外とけろっとして、普段の様子と変わらない。弟と僕は父の顔を見るたびに何と声をかけて良いものか分からず、上手く言葉がでてこない。

そこで、なぜ父は精神科医を選んだのか、聞いた事がない事に気づいた。

沢山の科がある中で、なぜ精神科だったのだろうか。内科や外科の方が花形の気がする。なぜ、珍しい精神科だったのだろうか。

僕は初めて、父に聞いてみた。

父は答えてくれた。父は思春期の頃思い悩んだ時期を過ごしていたらしい。何を思い悩む事があったのかは語らなかつたが、そこで一冊の本と出合ったと言う。フロイトの本だ。フロイトの本との出会いが衝撃だったらしい。フロイトの本と出合った歳が、今の僕と同じ中学二年生の頃だと話してくれた。

そして、精神科医になろうと決意したようだ。祖父母も医者ではない家庭に育ち、それまでは勉強はまじめに取り組んでいなかったように、医学部に入学できるような成績ではなかつた父が、な

りたい将来の夢が決まった途端狂ったように勉強に励んだという。

だから、なりたい職業に就けて幸せだと父は言う。だから、今日のようなことが起きてでも耐えられるのだという。自分のやりたい事ができているのだからと。

父と話した後、考えた。僕には将来について考える事も、なりたい職業も決まってははいない。父の話を聞いた後、そんな僕がすごく恥ずかしく思えてならない。何も考えず、こうやって歳ばかり重ねてしまうのでないかとさえ思えてならないのだ。今のところ、父のように医者になろうと思つた事はない。両親は、自分のなりたい職業を見つけてその仕事をできれば、どんな職業でも応援すると言ってくれている。けれど、自分の将来について、夢について考えようとした事すらない。夢は無理やり考えるものではないと思うが、そろそろ自分の将来について真剣に考え始めてもよいのではないかと思えた。その夢を決める事ができたなら、父がそうだったように、今は苦痛でならない勉強もきつと楽しむことが出来るだろう。自分の人生は自分で決めなければ、父のように納得して仕事に臨めないだろう。反抗して父の言う事に耳を傾けようとしめない事もあるけれど、今日の父の言葉は私には重く感じた。